

白鳥日記から

奥州 三四郎

十文字町白鳥クラブ, 019-0513 平鹿郡十文字町植田字一ツ屋71

白鳥の声で夜明ける皆瀬川

白鳥におはよう言うて餌をやり

白鳥が寄って来る様な仲となり

これは、皆瀬川に毎日通いながら俳句のつもりで始めたもので、本当に70からの手習いである。

さて、私達が白鳥の世話をする様になったのは平成5年12月1日からで、故佐藤勇太郎さん、87才で今も益々お元気な泉川清太郎さん、この二人の後を引き継いだのです。その後、堀田さん、林さんと担当は変わりましたが、皆さん共に優しく指導してくれて、休日もきてくれるなど、それはそれはペンでは書き表せない程の親切でした。

又、西成町長さんも忙しい中を度々立ち寄ってくれ、「皆さん、御苦勞様です」と温かい声をかけてくれます。本当に、お茶も上がらず忙しく帰って行かれます。私達は感激し、一層励まねばと思っております。又、早朝カメラを持って、白鳥の群れを撮っている時もあります。

私達の仲間は、男4人、女4人。老人ながら末だ口だけは達者です。朝夕に白鳥に餌をやりながら犬を連れて来たり、一寸したいたづらする方には注意したり、善意で糞などの餌を届けてくれる方にお礼を言い、お茶やお菓子、漬物などで接待しています。訪れるお客様、特に園児、障害のある方や高齢者には優しく対応する様心がけております。

白鳥も毎年忘れずに10月中旬初飛来、4月中旬の北帰行までの半年間、一番多かったのは平成9年11月2日の2,477羽が確認されています。

私達は冬の間、元旦も日曜も休みなく毎日通っています。特に休日は駐車場の整理に当たらねばなりません。約60台は大丈夫なのですが、遠くは九州からの観光バスも来ました。お茶受けの秋田の漬物は、おいしいとほめながら皆で食べてくれました。

毎日の出来事を、喜びも悲しみも含め日記に書いたのが4冊にもなりました。私

も物忘れがひどくなり、ぼけも進行中なので、毎日記す様にしている。去年の今日、4年前は、又あの方から受けた親切な言葉や頂き物、一寸した事件など今見れば記しておいて良かったと思う。

又、この休憩所の話題は、あの戦前の「ほしがりませんかつまでは」の合言葉、月月火水木金金と言った励まし、若い人は戦争へ、銃後の守りと少しの塩魚を食べるの田草取り、四つんがいになっての重労働の毎日、それが今は除草剤の普及で楽になり、食物も刺身肉など美味しいおかずで晩酌が出来る。テレビも何時でも見られ、昔に比較すれば正に雲泥の差で勿体ないなあ、幸せだと言う話になる。

更に話は若い頃の初恋の話や失恋の話、あの人は今はどうしているかしらとか、戦争に勝った時の大陸での話など、若い人には解らなくても私達には良くわかる。そして、敗れた戦争の苦しさや物不足の時代、あれから50数年・・・月日の流れの速いにはお互いに驚いている。気持ちだけはそのままに・・・。

今年も春3月、白鳥も北帰行間近に、その準備らしいグループの飛ぶ姿がみられるようになりました。只1羽の左の脚が痛いらしいのが見つかったけれど、私達はすることも出来ず、只見守るだけ。水中では泳いで、良く餌は食べる様です。

4月14日朝、白鳥が全部帰ったらしく、川の水が濁流となり、白鳥を追い立てた様です。もしやと思い、17日朝、川辺に行ってみたら、脚の痛いのが1羽、それに寄り添うようにもう1羽。夫婦だろうか、優しく連れを助けて治るまで待って一緒に帰るのだらうと思いました。翌18日の朝はもういかなったのでほっとしました。しかし、もしやと思い、羽後町の足田堤まで行ってみたら、やっぱり2羽で泳いでいました。私のそばまで寄って来ました。私は「餌もってこなくて、ごめんね」と言って、別れを惜しみつつ帰りました。

その後、佐藤彦治郎さんが行ったら、又も寄って来たので、持っていったパンを与えたと話してくれました。6月上旬、私は「雛でも生まれていないかしら」と期待しながら、足田堤へ行ってみたらもういませんでした。近くの話では、最近いなくなったということでした。連れ添って痛む足を治してやった優しい夫婦愛に、しみじみと胸を打たれる思いで、あの2羽が元気で北へ帰るようにと祈りました。

何時か又、白鳥日記の中から書きたいと思っております。

(十文字町さかみち誌、1998年8月号から転載)